

猿 橋
小学校

瑛玖良

瑛玖良校は明治期における猿橋小の旧名。切磋琢磨の意が込められている。



南極観測船 しらせ

校 長 磯部 裕之

前任校で、南極越冬隊に参加した青年の話を聞く機会がありました。自分自身はハウスメーカーの社員とのことで、帰国してからは、自分の経験したことを各地で小中学生に話しているんですとのことでした。

「先生は、この防寒服を着て登場してください」と言って手渡されたオレンジ色の防寒具は、服というよりも、綿のパンパンにつまった布団のようでした。重さも2～3Kgはあるのではと思われるほど、ずっしりとした重さです。エアコンのきいた部屋での講話でしたが、となりの控室で登場を待つ間に、防寒具の中は汗だくになってしまいました。

「このくらいじゃないと、南極の外の寒さには耐えられないんです」と講話の中で教えてくれました。そして、ブリザードが吹き荒れると、1m先が見えなくなるとも。そんな中での外での作業は、みんな命がけです、と話してくれました。講話の最後に、その青年が見せてくれたのは、「1万年前の南極の氷」でした。見た目は氷ですが、コップに入れた途端にパチパチと音を立て始め、炭酸水のようなイメージです。パチパチと音を立てているのは、氷に閉じ込められた1万年前の空気が、氷が解けて外に解き放たれるときの音だそうで、「これが、地球上の1万年前の空気か」とみんな感激しながらそのパチパチの音を聞きながらコップの中をのぞき込みました。

南極船しらせは、現在3代目が活躍しています。南極まで、片道約40日かけて、観測隊員（海上自衛隊員180名、観測隊員80名）や燃料、食料物資を輸送するという任務です。砕氷艦としての性能は世界トップレベルで、氷の厚さが1.5m以内であれば停止せずに進むことができるということです。では、なぜ、南極で観測が続けられているのか。それは、南極地域は人間にとっての環境汚染が最も少ないということで、その南極の氷や空気、海を調べることは、環境問題の基礎情報となるのだそうです。

毎年、猛暑、酷暑と言われ続け温暖化が止まらない近年ですが、こうやって環境破壊を防ぐために、厳しい条件の下で調査してくださっている方がたくさんいるのだと思いました。

いよいよ暑い暑い夏がやってきました。節電・節水も心がけつつ、冷房や給水、休息を適宜取りながら、暑さに負けずに1学期のまとめに取り組んでまいります。



【写真；SHIRASE ホームページより】

